

白新線の記念碑について

この記念碑は現在、豊栄駅南口の正面左側に建っています。現在ではあって当たり前の電車ですが、その昔「ここに鉄道を！」と切に願い、多くの方々が尽力されたと聞いております。明治30年に話がおこり、計画は進んでは消えの連続。木崎を走らせる計画もあったそうですが、最終的には葛塚の現在の場所に決まり、昭和27年12月によろやく一部開通の日を迎える事ができ、町はちょうちん行列の祝賀一色。ちょうちん行列は平成18年の(橋上化)豊栄駅完成の時にもやったので御記憶の方もありませんでしょうか。



表面: 歡天喜地
裏面: 昭和廿七年十二月廿三日
白新線開通記念 吉田光一 石匠 齋藤義雄

この碑を建てたのは実家の祖父吉田光一でありまして、私の子供の頃は自宅の庭にありました。

自身も陳情やら様々な活動をし、悲願叶って開通の喜びのあまり、『歡天喜地(かんてんきち)』とするし(この揮毫は祖父の書の師である春洋先生です)、自宅庭に記念碑を建てたのでした。自営はんこやの60年続いた店の名を「可芳堂」から「白新堂」と変えたほどでした。裏には自身の名と工事をした当社三代目齋藤義雄の名を刻んでいます。2人ともとうに亡くなっていますが、思いと歴史は石に託され残っています。



白新線開通を祝うちょうちん行列 (昭和27年12月)

碑のそばには新潟市北区郷土博物館の設置した説明板も立っています。興味のおありの方、ぜひ見てやって下さい。 【齋藤 美代子】

暮らしに石を(4)

想いそのままに姿を変えて、再び出会うぬくもりの品

当社にお問い合わせいただく中で、今あるお墓が古くなったので建て替えたい、又は様々なご事情でやむを得ず改葬(墓じまい)をしたいというご相談があります。

工事を行い、ご供養をされて、完了。となるのですが、ご施主様が今まで大事に守ってきた、いつもお参りしていた思い入れのある古墓を見て、石屋としてもっと寄り添える事はないかと考え、大きなお墓を小さなお地蔵様に変身させて、手元に置ける様に致しました。

(別の変身も今後検討していきたいと思っております。)

【小林 絵里子】



小さなお地蔵様
幅60mm×奥行45mm
×高さ150mm



床の間、お仏壇、居間などに飾ってみませんか？

編集後記

今号もお読みいただきありがとうございました。急に陽気になったかと思えば、または冬に戻った様な天気になってみたり…今年の春は少し不思議でした。桜も早くに咲き誇り、花見をする間もなく散ってしまいました。もう少し風情と言う物を味わいに積極的に出かけたこの頃です。次号は7月頃の発行予定です。ではまた。【齋藤 勇介】

このニュースレターに関するお問い合わせ・ご意見・ご要望はこちらまでお願いします。お届け先の変更や、ニュースレター送付不要の際もお知らせいただければ幸いです。(担当: 齋藤 勇介)

(有) 齋藤石材店 〒950-3321 新潟市北区葛塚4804 Tel:025-386-3491 Fax:025-386-3493
E-mail:saitougs@beach.ocn.ne.jp ホームページ:http://www.saitougs.com/



ごめんください。
陽春の候、人も自然界も活発に動き始めたようです。豪雪には驚かされましたが、皆様なじに過ごされてましたか？ ニュースレターも5号、2年目を迎えました。楽しんでお読み頂ければありがたいです。



石屋と言う仕事は、冬場はほとんど現場仕事がありません。この為、冬の時期当社では主に加工技術の研鑽の時期となっております。春になったら建てるお墓や建築材を加工したり、手加工の技術を高めたりしております。

今号ではP3で手加工の仕上げに関して、P4では高めた加工技術でお客様の心のやすらぎを大切に作る品を作ってみた事などを紹介させていただきました。お読みいただき、実際にご覧になられたい方はお気軽にお声掛けください。

春を迎えると、当社ではお客様のお盆のお参りの為の準備を進め始めます。少し早い気がしますが、お墓を建てたり直したりするには長いと2か月くらいの期間が必要になる事もあるからです。

冬の間を高めた技術と真心で皆様とご先祖様の懸け橋を創るお手伝いをして参ります。



ホームページ: <http://www.saitougs.com/>
E-mail: saitougs@beach.ocn.ne.jp

齋藤石材店 新潟 で検索

本社・工場
新潟市北区葛塚(正尺)4804
日本海沿岸東北自動車道
豊栄新潟東港I.C.すぐ近く
Tel: 025-386-3491
Fax: 025-386-3493



太平店
新潟市東区太平2丁目1-31
国道113号沿い
新潟空港の目の前です
Tel/Fax:
025-275-9638



誰も教えてくれないお墓の力(ちから) 今野栄一朗 著

第4号で紹介させていただきましたこの小冊子について、今回から1章ずつ内容を抜粋して連載していきます。

第1章 お墓には不思議な力がある

私たち石材業者は、「お客様からお墓の工事を請け負い、お客様の注文通りの墓石を間違いなく作り、お引渡しをする」のが仕事です。一部、墓石のアフターフォローなどの仕事は引き続き残りますが、お客様からのご依頼の仕事はこれで完結します。

しかし、これからお墓を持たれるあなたは違います。

石材業者の仕事が完了した後から、あなたの本当のお墓作りが始まっていくのです。

つい「石材業者側の発する情報が、お墓のすべて」と勘違いをしてしまい、お墓の外面ばかりに気をとられ、肝心な内面を見ることなくお墓を作ってしまうと、お墓の真の意味がよくわからないまま、お墓を使用していくことになります。

すると、お墓参りや供養も儀礼的になってしまい、せっかく新しく作ったお墓も時が経つにつれ、お墓参りや墓石の管理が徐々に負担になってくる。

これではお墓を作っても、あなたや家族に何のメリットもありません。「お金をかけて意味のわからない“負担物、を購入してしまった」ということになってしまいます。

私は、今までは「この仕事では、高品質な墓石製品をお客様に提供することが、自分の使命だ！」と考えてきました。

でもいつか「人はなぜお墓を作るんだろう？亡くなった方は、本当にお墓を必要としているのだろうか？」と、徐々に疑問に思うようになってきました。そして「お墓とはいったい何だ？」と、お墓の必要性やお墓の持つ意味を深く考えるようになりました。

その結果、お墓には墓石の形や供養儀式など、私たちに見える部分と、お墓の意味を深く掘り下げないと見えない部分がありますが、その見えない所にこそお墓の持つ、不思議な力が隠されていることに気づいたのです。

この冊子の紹介は、この先何項かに渡りますが、新たな気づきが得られ、とても腑におちる話と思います。

どうぞ期待下さい。

※冊子をご希望の方はお気軽にご連絡ください。



新潟市北区神谷内 地藏院庵住様よりご寄稿いただきました。

倶会一處(くえいっしょ)について

浄土真宗の方々のお墓によく見られている文字で南無阿弥陀仏と倶会一處があります。その倶会一處の事について。

今まで私は倶会一處の意味として「人が亡くなると誰もが阿弥陀様の国に行くのです。〇〇家の人達は、皆このお墓に集まるのです。」と話をしていました。以前、お寺様に「阿弥陀経に載っている」とお聞きした様に思います。

最近親鸞聖人と浄土真宗(武蔵野大学教授・山崎龍明監修)という本に出会いました。その中に三つの経典「無量寿経」「観無量寿経」それに「阿弥陀経」の解説文が少し載っていました。阿弥陀経は極楽の有り様を説明している経典の事、その一部にこんな事が書かれていました。

「阿弥陀経」はこの国に生まれた人々はもはや退くことなく、一生補処(いっしょうぶしょ)の菩薩(ぼさつ)(次には自身が仏になる段階の者)が多いのだという。そして釈尊は弟子の舍利弗(しゃりほつ)へ「ですから舍利弗よ、その国に生まれたいと願いなさい。そうすれば倶会一處、すなわち極楽に善き人々と同じ所にいることができます。」と告げる。お墓にはよく「倶会一處」と刻まれているのは、この説法による。紹介します。私も初めて教わりました。

【齋藤 繁樹】



石屋のイロハ(4)

今回は原石から石を形に仕上げる事、中でも手加工の大切さを話します。採石場で採掘された原石をノミと鍬を用いて色々な形に出来る者を石工と呼びます。原石から手仕上げの最後までの手順を写真で紹介します。



加工されていない原石の状態。ここからどの様な加工をするのか決めて寸法を出し、墨掛けをする。この状態も「割肌仕上げ」と言う仕上げで使用される事もある。

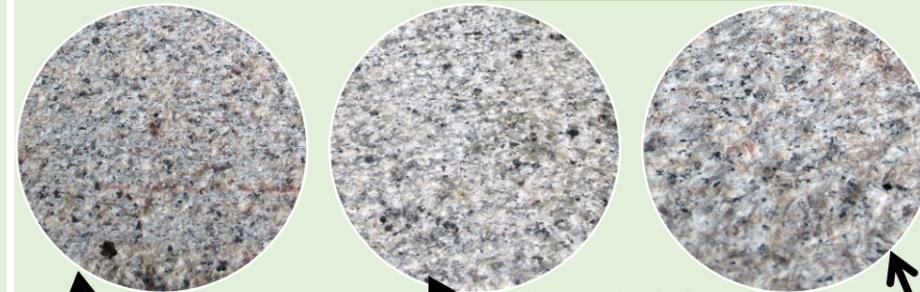


仕上げたい高さの少し上の場所までノミで縦目の溝を作る。



荒切りした溝の底に合わせて山になっている部分をノミで荒くむしる。

仕上げ目の拡大写真



小叩き仕上げは手仕上げの中でも最上級の仕上げとされる。

刃が8×8で仕上げたものは「8枚ビシャン仕上げ」刃が10×10仕上げたものは「10枚ビシャン仕上げ」と呼ばれる。



荒むしりでできたコブをノミでさらに細かくむしる。「むしり仕上げ」



ビシャン仕上げの面を「片刃・両刃」と言う道具で一方に細かく叩き、叩き目を揃えて仕上げる。「小叩き仕上げ」



さらに細かいビシャン(刃の数が8×8や10×10の物)で叩き、平らにし、目を揃える。「ビシャン仕上げ」



コブの付いた鍬(ビシャン)で叩き、表面を平らに整える。荒ビシャンは刃が4×4や5×5の物。「荒ビシャン仕上げ」

この様な工程を現代では一気に切断機や切削機で仕上げてしまう事が多くなっています。しかし、石本来の独特の味を生み出す事が出来るのは、原石を必要に応じて機械で寸法切りし、そこに石工の技で手加工を施す事、それが一番だと思えます。その為に何年もかけ石の仕上げを教わり、日々技術を磨いていっております。※この仕上げ見本を実際にご覧になられたい方はどうぞ豊栄本店までご来店下さい。【齋藤 繁樹】